研究会報告

丸山　徳次

里山ORC研究会は、今年度、以下のように第10回から第15回まで、全部で6回開催された。

第10回研究会　2006年6月18日（日）　14:15～17:30
於：キャンパスプラザ京都6階
（1）北川秀樹「中国の環境アセスメントと公衆参加」
（2）秋津元輝「カルチュラル・ターン後の農村研究と課題」

第11回研究会　2006年8月30日（水）
於：龍谷大学瀬田学舎智光館201教室
山本早苗「仰木の水利―井堰親制度について」

第12回研究会　2006年12月1日（金）　17:00～20:20
於：龍大瀬田学舎7号館 環境演習室2
（1）宮浦富保「日本の里山の現状」
（2）江南和幸「江戸市民が見た自然」
（3）須藤　護「里山：人と神と動物たち」

第13回研究会　2006年2月9日（金）　13:15～14:50
木村一也（金沢大学自然計測応用研究センター）
「果実・種子散布に関する話題から―北陸地方における果実資源と果実

食鳥類の多様性と分布の動態」

第14回研究会　2007年2月13日（火）　13:00～17:00
西本順蔵（吉野森林振興協議会理事）
「『龍谷の森』の人工林施行の指針」

第15回研究会　2007年3月6日　（火）13:00～16:30
河村耕史（森林総研関西支所）
「『龍谷の森』におけるツツジ類の保全を目的とした森林管理の指針作り」

今年度は、2006年12月16日に開催された国際シンポジウムが非常に重要なものだったので、第12回研究会を、国際シンポジウムのための「勉強会」として、日本側のパネリストである3名の里山ORC研究スタッフの方々に報告いただいた。実際、この「勉強会」は国際シンポジウムを成功させるために非常に有益なものだった。

なお、「研究会」とはしなかったが、やはり国際シンポジウムに向けた「勉強会」という趣旨で、2006年10月13日（16:50～19:30）、阪本寧男先生の講義「仏教と植物」に参加し、そのあとディスカッションをする会を開催した。これは、研究スタッフである鈴木滋氏（龍谷大学国際文化学部）の配慮で実現した「勉強会」だった。仏教の種々の行事で用いられたり、仏教における象徴的な意味で扱われたりする植物、つまり仏教の「植物文化」についてなされた、阪本先生のこれまでの旅の経験などと重ねた講義は、大変興味深く、ディスカッションも大いに盛り上がった。

また、今年度は、やはり「研究会」とは呼ばなかったが、各研究班が主催する調査研究会および研究調整の会合が行われた。まず、2006年8月18日（金）、研究班2の主催で、大津市歴史博物館に調査に行った。（参加者：須藤護、丸山徳次、吉村文成、三阪佳弘、秋津元輝、龍口明生、土屋和三、山本早苗、蘇理剛志、蔭山歩）　田上地区および仰木地区の古文書を調査するのが主目的だった。古文書の一覧表が見事に整理されているので、それをまずコピーさせていただくことの了解を得た。膨大な資料を前にして、私などはしばしただ佇むほかなかったが、須藤護研究スタッフの指導で、①山の利用、②水の利用・管理、③村の規約、④祭関係、といった観点に絞って古文書資料の調査を

続行することとした。

2006年9月22日（金）には、研究班1が瀬田キャンパス内で研究調整の会合を開催し、研究の進捗状況、今後の研究計画等につい話し合い、後半は研究スタッフの野間直彦氏（滋賀県立大学）が「里山林を伐って獣害を防ぐ」および「入会権が時効？」と題した2つの報告を行った。前者は、滋賀県の白王町における白王里山プロジェクトを代表事例とする獣害対策についての報告だった。野間氏が重要メンバーとなっているNPOおうみ木質バイオマス利用研究会および滋賀県立大学のGP「農村エコツアー　知農考獣」に関する話題、そして「重要文化的景観」に指定された近江八幡の水郷地帯についての話も興味深かった。「入会権が時効？」の報告は、山口県上関原発計画に関するもので、2005年10月20日、広島高裁において入会権には20年の時効があるとする、驚くべき判決が出され、現在、最高裁の判決が注目されているところである。この入会権問題は、全国の里山保全にとっても重大なものであり、いずれ改めて研究会を開催する予定にしている。

もう一つ今年の特徴は、フィールドワークを含む研究会をいくつか開催したことである。まず、研究班2が主催した第11回研究会（2006年8月30日）は、午前中に山本早苗氏の報告があったあと、午後からは上田上町を調査し、真光寺を訪ねるフィールドワークを行った。また、第13回研究会では、木村一也氏に報告をしていただいたのとは別に、「龍谷の森」で種子を採集し、それを調査する実習を、学生たちにしていただいた。さらに第14回および第15回の研究会では、実地に「龍谷の森」に入ってそれぞれのテーマごとに専門家の意見を聴取する研究会を実施した。なお、第14、15回の研究会では、「龍谷の森」里山保全の会の有志の方々にも参加いただいた。

以下、私からは、第10回および第12回の研究会についてのみ、その内容を報告しておきたい。そのあとは、各報告者自身による「研究会報告（要約）」を掲載する。ただし、第12回研究会の報告（宮浦富保、江南和幸、須藤護）については、国際シンポジウムの「講演」を見ていただきたい。また、第14回研究会については土屋和三が要約報告する。

第10回研究会について

（1）北川秀樹「中国の環境アセスメントと公衆参加」

0）中国の環境はどうなっているのか、1）中国の環境アセスメント、2）公衆参加、

3）公衆参加の課題、4）制度の比較〔省略〕、5）参加型環境アセスメントについての考察、という順に話がなされた。中国では、1979年の環境保護法（試行）のあと、1989年の制定において環境アセスが正式に位置づけられ、2003年環境影響評価法が施行された。公衆参加そのものは、80年代末に公共料金の価格決定に際して意見聴取がなされたりしたのが始まりであり、人民が主人公とする憲法規定に則って次第に確立されてきた。従来は直訴型が多かったが、04年以後、公聴会方式が開始され、アンケート調査が多様されているのも特徴点である。アセスと公衆参加は、78年以後の改革の進展として評価しうるが、事業者・政府の利益優先の傾向があることや、不徹底な情報公開に問題があるし、なお公衆の意識の低さと、とりわけ中央政府と地方政府の裁量権の大きさとの間にある確執に問題がある。

（2）秋津元輝「カルチュラル・ターン後の農村研究と課題」

1）私の履歴、2）農村社会研究の課題、3）農村研究の文化論的転回、4）ターン後の農村研究領域、5）里山研究に向けて、の順で話がなされた。かつて「山村」がそうであったように、「農村」は作られた概念であり、とりわけ1998年の「食料・農業・農村基本法」による「政策の眼差し」によって構築されてきた。先進諸国における現代農村研究は、ポスト生産主義の動向の下、「農村空間の商品化」、「農村らしさの構築」、「農村住民の多元性」をめぐってなされている。文化論的転換以後の農村研究の領域としては、①ふるさと環境を売る農村ツーリズム、②農村景観をめぐる保護と利用の対立、③農村ジェンダーに関するディスコース分析（男性中心主義的な資源利用の実態分析）、④混住化からＩターンまでを連続的に考える視点、といったものが考えられる。これらに対応した里山研究としては、①ローカル・ノリッジの再認（地元の人々がどのように再認識していくのか）を考究すること、②景観論の文脈においてツーリズムを考察し、提供者と来訪者との相互におけるイメージのギャップを考察すること、③実践・身体レベルの可能性として暮らすことがもっている根元性を、所作や時間のリズムにおいて探究すること、などが考えられる。

〔補足〕当日は13時より研究班2の会合がもたれ、今後の研究について話し合われた。調査研究対象を拡大していくのではなくて、瀬田丘陵周辺および湖南地区に限定し、また、研究テーマと研究スタッフをグループ化して責任を分散するのが良策であろう、と

話し合われた。研究会の終わりに、高桑進氏が「龍谷の森に設置されたバイオトイレの有効性に関する研究」について簡単に報告し、バイオトイレのより一層の利用を訴えた。

第12回研究会について

今回の研究会は、国際シンポジウム「里山とは何か：自然と文化の多様性」の日本側パネリストによるプレゼンテーションについて、検討することになった。結果的には、非常に有意義な研究会となり、今後もシンポとは関わらなくとも、テーマを設定して研究会を実施するというやり方が有効かもしれないと思われた。

（1）宮浦富保「日本の里山の現状」

農用林としての里山、伝統的な里山利用の諸形態、エネルギー革命・農業革命以降の里山の放置、赤松林の減少・竹林の拡大、里山の現代における利用可能性への問い等について、パワーポイントを用いて論じられた。－　高度経済成長期を境目として「里山」の過去と現在とを区分するとき、里山の過去はどこまで遡れるのかについて、議論が出された。種々の観点からして、江戸時代の初期から中期にかけての時代が、里山を「里山」として意識する上で重要な時代だったかもしれない、と思われる。また、「遷移」過程を強調し、現代においても、遷移を人為的に押しとどめることの重要性を強調すべきではないか、との指摘もなされた。

（2）江南和幸「江戸市民が見た自然」

江戸時代の歌人・大隈言道に焦点をあてて、言道の歌およびほぼ同時代の絵画作品を提示することで、江戸の市民が園芸植物をどのように楽しんだのか、農の営みをどのように見たのかが論じられた。－　地域の特産野菜に見られるような、地域ごとの「多様性」に焦点をあてることで、シンポの重要課題である「自然と文化の多様性」により明瞭に応えられのではないか、との指摘がなされた。また、「ガーデニング」という観点から見るならば、種々の論点が提出できるのではないか、との指摘もあった。江戸市民における園芸品種への嗜好は、それ自体が開発による自然の喪失の結果であったのではないか、という議論もだされた。

(3) 須藤　護「里山：人と神と動物たち」

江戸期以降の里山に関して、それが果たしてきた役割を整理し、とりわけ生き物たちとの共生のあり方に焦点をあて、山の神に関わった儀礼を検討し、さらに近江地方の山の神まつりが論じられた。— 里山の果たした役割として、農耕民と野生動物の緩衝地帯、農耕民と山の民との住み分け、ということが指摘されたが、主としてこれを巡って議論がなされた。山の神をめぐる儀礼とそこに表現された一種のメンタリティーが、本当に動物たちとの共生を可能にしてきたのかについて、疑問が出された。ただし、「緩衝地帯」という捉え方は、むしろ里の民と動物たちとがそこで衝突しあういわば前線と見るとき、種々の儀礼も「緩衝地帯」を保持するための儀礼として非常に興味深く思われる、といった議論がだされた。